

2008年8月20日

報道関係各位

日本パラリンピアンズ協会 (PAJ)

9/6～9/17の12日間、“北京パラリンピック”で熱戦が繰り上げられる！！

開幕直前「パラリンピック選手の競技意識調査」発表 — 調査からみえるパラリンピアンズの努力と本音 —

- 選手の励みは「家族や身近な人の応援」そして「競技に勝つこと」
- 「オリンピック = パラリンピックになるべき」
- 「障害者スポーツと表現せず、スポーツと表現して欲しい」
- 「メディアは、福祉ではなく、スポーツとして捉えて欲しい」など選手の声も
(パラリンピックや障害者スポーツの今後についての要望や夢 より)

日本パラリンピアンズ協会（略称 PAJ 会長：永瀬 充）は、2008 北京パラリンピック競技大会（北京パラリンピック）開幕を直前に控え、「パラリンピック選手の競技意識」と題した調査を実施しました。

調査は 2008 年 6 月 8 日～23 日に、2008 年北京パラリンピック代表第一次決定選手と 2010 年バンクーバー大会強化指定選手を対象に行い、152 選手（夏季 131、冬季 21）からの回答を得ました。選手の競技へ取り組む姿勢ばかりでなく、競技環境や周辺の理解、経済状況などについても現状の声を聴きました。パラリンピック選手を対象にしたこのような調査は PAJ にとって初めてとなります。

PAJ としては、今回の調査結果を多くの皆様にお伝えすることで、今まで以上にパラリンピックへの関心が高まり、パラリンピック選手ならびにパラリンピックを目指す選手への応援と理解に結びつくことを期待しています。

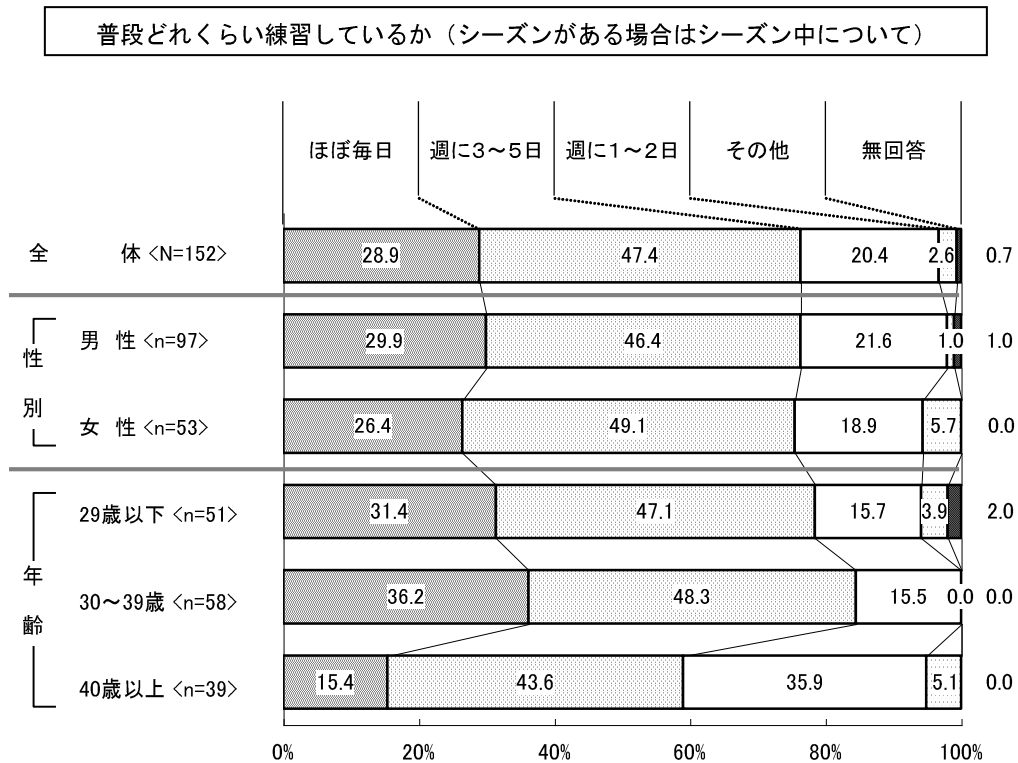
なお、本調査は、財団法人日本障害者スポーツ協会およびパラリンピック選手の広報活動を支援している株式会社電通パブリックリレーションズ（東京都中央区銀座／代表取締役社長・安藤克彦）の協力のもとに実施しました。

「パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査」調査概要

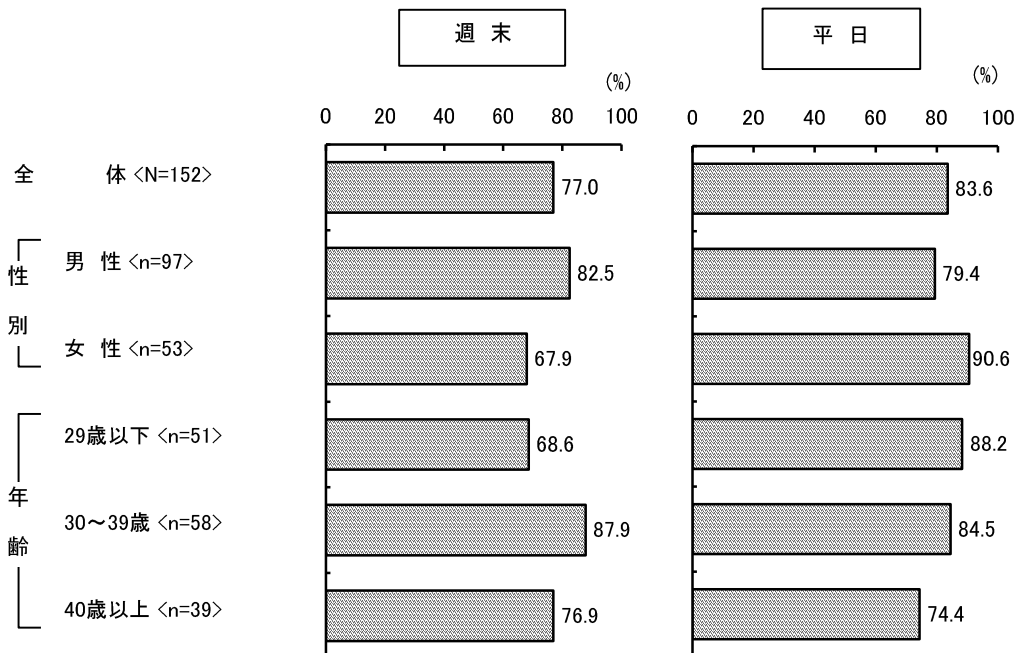
※詳細は別添の報告書をご参照ください。

1. 練習は「週に3-5日」(47.4%)「ほぼ毎日」(28.9%)とハード

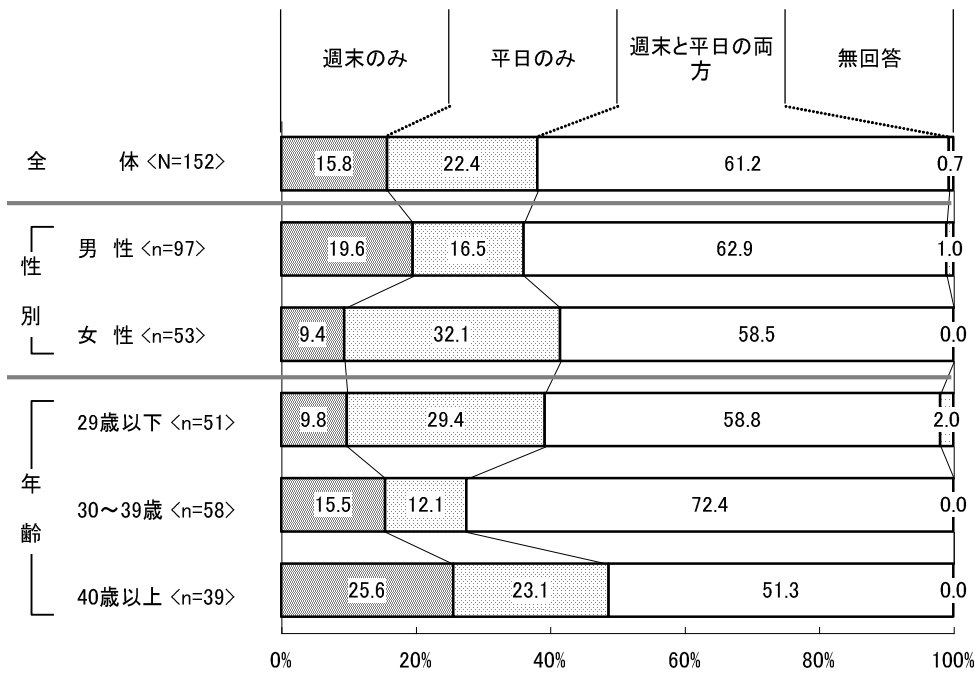
- ・ 「普段どれくらい練習しているか」について聞いたところ、約3割が「ほぼ毎日」、約5割が「週に3-5日」とかなりの練習量で、多くの選手が仕事との両立をしていることから考えると、かなりのハードスケジュールといえます。
- ・ また、週末、平日の使い方を見てみると、「平日」83.6%「週末」77.0%、で「平日と週末」の組み合わせが、6割を超えて圧倒的に多くなっています。



練習をするのは週末か平日か①（複数回答）



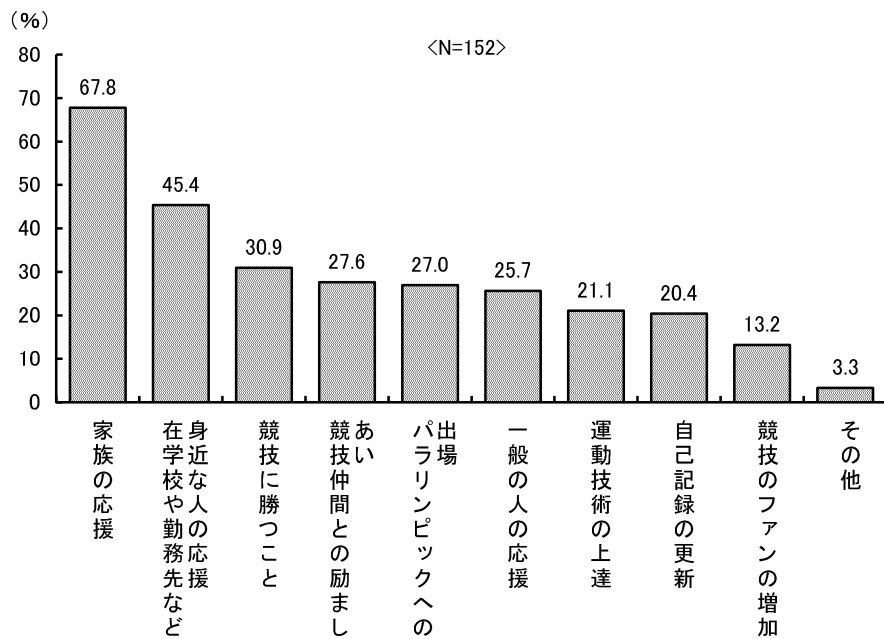
練習をするのは週末か平日か②（複数回答）



2. 励みになることは「家族の応援」「身近な人の応援」「競技に勝つこと」

- ・ 「パラリンピック選手として特に励みになること」は「家族の応援（67.8%）」が圧倒的に多くなっています。
- ・ ついで「在学や勤務先などの身近な人の応援（45.4%）」また「一般の人の応援（25.7%）」をあげる人も見られ、人々の応援が何よりも励みになっていることがうかがえます。
- ・ 無論、アスリートとして「競技に勝つこと」も3割を超えています。

パラリンピック選手として特に励みになること（回答3つまで）

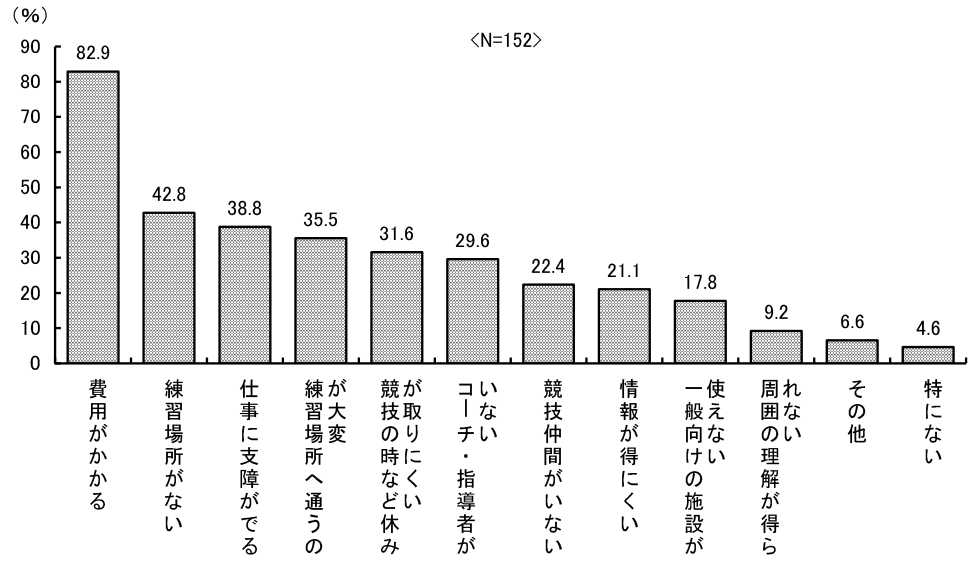


性別	男性 <n=97>	66.0	43.3	30.9	25.8	29.9	25.8	22.7	17.5	17.5	3.1
女性 <n=53>	71.7	49.1	32.1	32.1	22.6	22.6	18.9	24.5	5.7	3.8	

3. 一方、大半の選手が苦勞しているのは「費用の捻出」と「練習環境の確保」

- ・ 「現在の競技スポーツを行ってきて苦勞したこと」については、「費用がかかる（82.9%）」が、他の選択肢から突出しています。
- ・ また、「練習場所がない（42.8%）」「練習場所へ通うのが大変（35.5%）」「一般向けの施設が使えない（17.8%）」という結果から、練習環境の確保に苦勞している実態が浮かび上がりました。
- ・ 男性は「費用がかかる（85.6%）」、「仕事に支障がでる（41.2%）」がより高いです。女性は「一般向けの施設が使えない（28.3%）」が高く、パラリンピックアスリートとしてトレーニングに打ち込める施設を求めています。

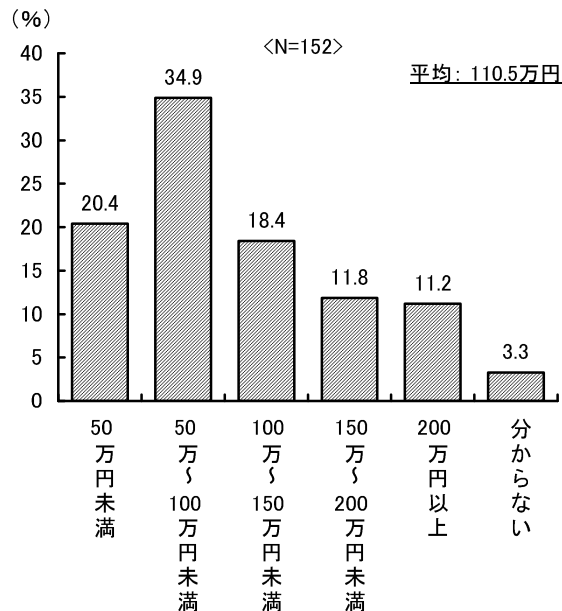
現在の競技スポーツを行ってきて苦労したこと（複数回答）



性別	男性 <n=97>	85.6	43.3	41.2	34.0	34.0	30.9	22.7	20.6	12.4	7.2	6.2	2.1
女性 <n=53>	77.4	43.4	34.0	37.7	28.3	28.3	22.6	18.9	28.3	13.2	7.5	9.4	

4. 半数弱の選手が年間 100 万円以上を個人負担。一人あたり平均負担額は 110 万円
- 「一年間に、競技のために個人負担する費用」については 55%強の選手が 100 万円未満だが、「100 万～150 万円未満 (18.4%)」、「150 万～200 万円未満 (11.8%)」、「200 万円以上」(11.2%) という回答もあり、平均では 110.5 万円に達しています。
 - 夏季と冬季の平均額では、冬季が 163.1 万円に対し、夏季が 101.7 万円と、60 万円以上の差が出ています。
 - 性別での平均額は男性が 111.9 万円、女性が 104.7 万円とあまり差はありません。

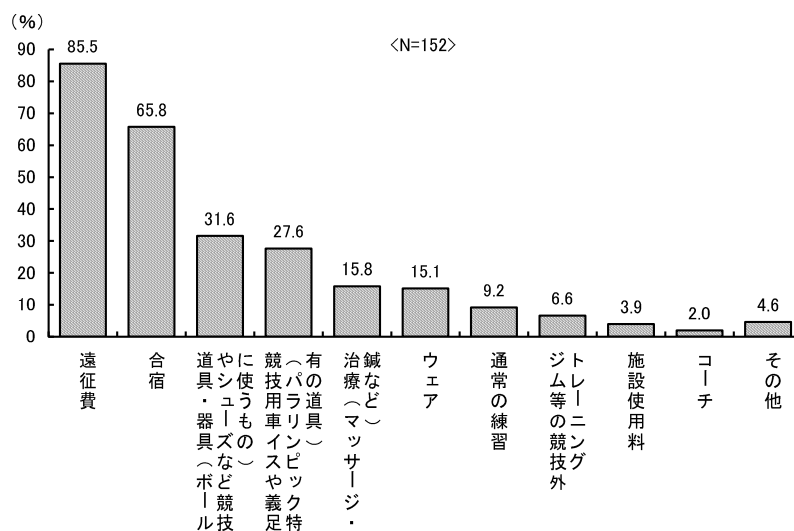
一年間に、競技のために個人負担する費用



5. 経済的負担の柱は「遠征」と「合宿」

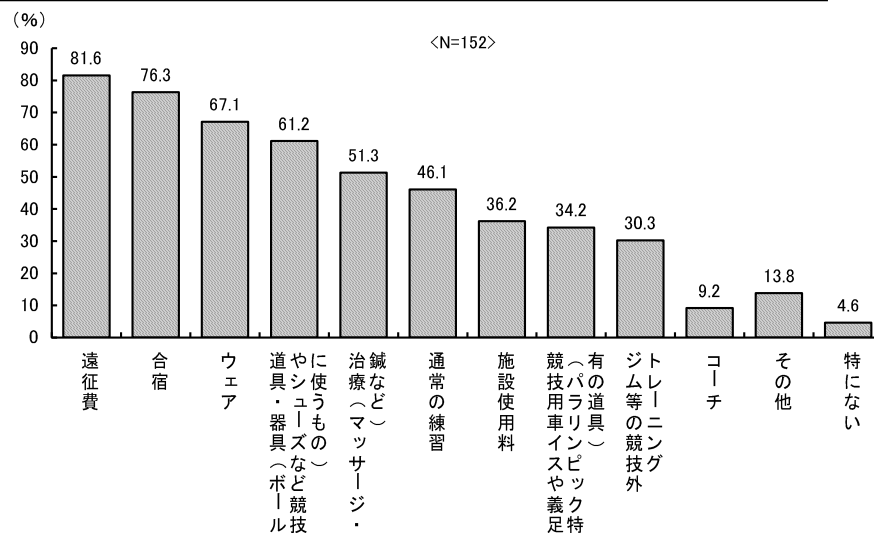
- ・ 「競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いもの」【回答 3 つまで】については、「遠征費（85.5%）」、「合宿（65.8%）」への回答が多いです。
- ・ 「競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているもの」【複数回答】については「遠征費（81.6%）」「合宿（76.3%）」「ウェア（67.1%）」と続いています。何%の人が自己負担をしているか＝自己負担率でも両項目は高い数値となっています。

競技スポーツにかかる費用のうち、金額が多いもの（回答 3 つまで）



性別	男性 <n=97>	88.7	63.9	37.1	29.9	13.4	14.4	11.3	4.1	3.1	-	3.1
女性 <n=53>	81.1	69.8	22.6	24.5	18.9	17.0	5.7	11.3	5.7	5.7	7.5	

競技スポーツにかかる費用のうち、自身が負担しているもの（複数回答）

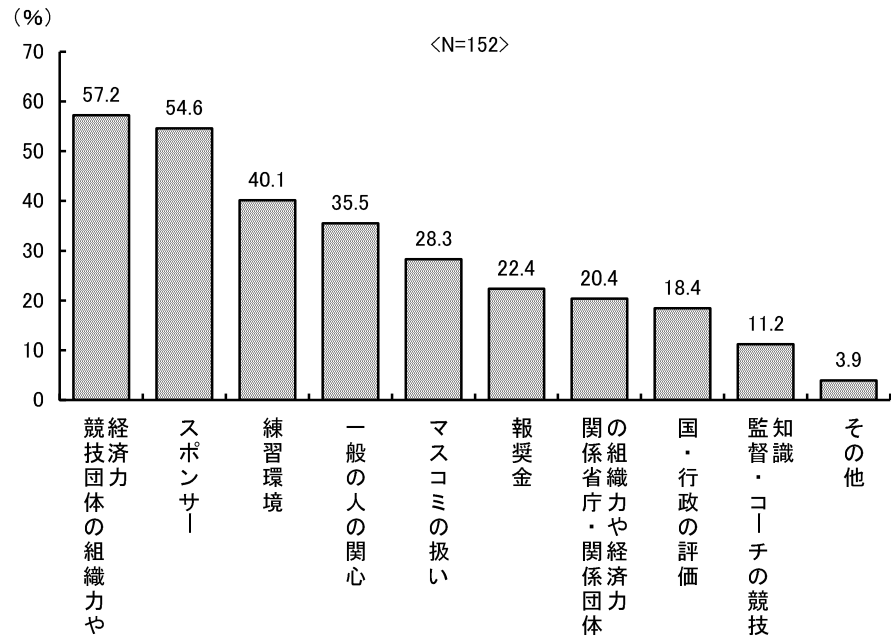


性別	男性 <n=97>	82.5	75.3	63.9	64.9	47.4	49.5	34.0	36.1	28.9	6.2	11.3	4.1
女性 <n=53>	81.1	79.2	73.6	54.7	58.5	41.5	41.5	30.2	34.0	15.1	18.9	5.7	

6. オリンピック選手との違いを感じる点として、男性は「経済力」を、女性は「社会の関心・評価」を上げる

- ・ 「パラリンピック選手とオリンピック選手では何が違うと思うか」（回答3つまで）については、「競技団体の組織力や経済力（57.2%）」、「スポンサー（54.6%）」の2つが半数を超えています。
- ・ 以下「練習環境」（40.1%）、「一般の人の関心」（35.5%）、「マスコミの扱い」（28.3%）、「報奨金」（22.4%）、「関係省庁・関係団体の組織力や経済力」（20.4%）、「国・行政の評価」（18.4%）、「監督・コーチの競技知識」（11.2%）の順となっています。前項の苦勞したことで第一にあげられた「費用がかかる」（82.9%）という実感の背景が語られています。

パラリンピック選手とオリンピック選手では何が違うと思うか（回答3つまで）



性別	男性 <n=97>	63.9	61.9	38.1	28.9	27.8	22.7	20.6	11.3	10.3	5.2
	女性 <n=53>	45.3	41.5	41.5	49.1	30.2	22.6	18.9	30.2	13.2	1.9

7. 競技をするようになったきっかけはさまざま

「小さい頃からスポーツをするのが当たり前で、障害を背負ってからも自分にできるスポーツを見つけるのが当たり前だった」

「両親がパラリンピックに出て欲しいと言った」

「生きがい。メダルを獲ることの喜び。人に希望を与えられる」

「アーチェリーは健常者とハンディが無い」

「大学生で、足を切断し将来が見えなくなった。その状況を打破するために目標や夢を見つけようと思った」

(設問「現在の競技スポーツをどのようにして始めたのか」より)

8. パラリンピックや障害者スポーツの今後についての要望や夢は「一般の人の興味を持って欲しいこと」と「健常者スポーツと障害者スポーツを分けて考えて欲しいこと」

「オリンピック同様に、一般の人に興味を持ってもらいたい」

「選手一人ひとりがアスリートとして日本代表として誇りを持って戦える環境を」

「障害者スポーツと表現せず、スポーツと表現して欲しい」

「マスコミは福祉としてではなく、スポーツとして捉えて欲しい」

「オリンピック = パラリンピックになるべき」

「オリンピックと同時開催に」「オリンピックのなかで競技を行ってほしい」

「日本でも、パラリンピックを開催して欲しい」

「プロとして競技に打ち込んでいける環境を」

(設問「パラリンピックや障害者スポーツの今後についての要望や夢」より)

■調査手法

調査方法： 各競技団体を通じて、調査票を配布。本人の記入後、
郵送（一部FAX、電子メール）で回収

調査期間： 2008年6月8日～6月23日

調査機関： 株式会社電通パブリックリレーションズ

調査対象： 2008年北京パラリンピック代表第一次決定選手
2010年バンクーバー大会強化指定選手

回収率： 77.6%（発送数 196 / 有効回収数 152）

＜ご参考：日本パラリンピアンズ協会（PAJ）について＞

名称： 日本パラリンピアンズ協会（PAJ： Paralympians Association of Japan）

活動： パラリンピックに出場した経験を持つ選手たち（＝パラリンピアンズ）の有志
が設立した任意の選手会で、選手間の情報交換やパラリンピック関連情報の選
手へのフィードバックなどを実施

設立： 2003年7月

会員数： 70名

役員： ※出場大会はいずれも直近の大会のみ表示

会長	永瀬充（トリノパラリンピック アイススレッジホッケー日本代表）
副会長	大日方邦子（トリノパラリンピック アルペンスキー日本代表）
事務局長	河合純一（北京パラリンピック 水泳日本代表）
理事	尾崎峰穂（北京パラリンピック 陸上日本代表） 福留史朗（アテネパラリンピック 陸上日本代表）
監事	竹田賢仁（北京パラリンピック シッティングバレーボール日本代表）

本調査に関するお問い合わせ先

日本パラリンピアンズ協会 事務局

（〒104-8210 東京都中央区銀座 2-16-7 株式会社電通パブリックリレーションズ内）

担当：大日方（おびなた）、東木（とうき）、間中（まなか）

電話：03-5565-1095 / FAX：03-3541-0913

e-mail paralympians@yahoo.co.jp